お　名　前	性　別	終戦時の年齢	現 住 所
伊藤　哲人	男 性	８ 歳	東栄町本郷

姉の大開美穂さんにも電話取材し，補足，修正していただきました。
（終戦時１１歳）名古屋市中川区

「多くの人に救われた命」

取材日　２０２５．３．６

「私が満州へ行ったのは５歳だったので，断片的な記憶しかありません。いい思い出ではないので，思い出したくないし，話したくもないというのが本音です。」とおっしゃりながら話していただきました。

○　なぜ満州へ

私の父は政市で，満州に行く前は役場で収入役を務めていました。満州へ行くことになったのは，おそらく国策で町から開拓団への参加を説得され，やむなく協力したのではないかと思います。人に優しくみんなから好かれる性格だったようで，開拓団では経理指導員という立場で本部に勤めていました。父親一人で行けばよかったのですが，母と長女，私，二女の５人で満州へ渡りました。父は，家や田畑を売って行くつもりだったようですが，嫁に行った父の妹に猛反対されて家は売らずに行きました。その妹が家を守ってくれたおかげで，結果的に帰る家があって本当に助かりました。満州へ出発したのは，昭和１７年４月１０日頃だと思います。名古屋から列車に乗って下関に行き，そこから釜山に入りました。釜山からは何日かかけ，鉄道でハルビン，チチハルを経て，三合屯の東三河郷開拓団の村に着きました。

○　三合屯の暮らし

食糧は，トウモロコシやつぶしたうずら豆が主食でした。家の周りは見渡すかぎり大平原です。後で分かったことですが，私たちが行く前は作物が全く採れない湿地帯で耕作をしていたそうです。私たちが行った年から中国人が作っていた高台の土地を手に入れて，中国人を小作で働かせたわけですから恨まれるわけですよ。トウモロコシは２ｍ以上の高さに育ちますから，よほど肥沃な土地だったんですね。それも広大な面積で，畑の先はかすむぐらいですから，奪われた中国人はどんな気持ちだったでしょうか。

トウモロコシの収穫「東三河郷開拓団アルバム」より

草むらにはオオカミがいましてね。

夜になると，オオカミが豚の腹を食べに来ました。私は興味津々で，朝になって行って見ると，腹わただけ食いちぎられて仰向けになっている豚の死がいを何匹も見ました。家畜は，他に馬も飼っていました。馬は貴重で，畑を耕すのに使っていました。

開拓の様子　「東三河郷開拓団アルバム」より

冬は零下４０℃ぐらいになります。家の外に出ることはできません。家の中で，父が何十キロも離れた町から買ってきてくれた本を，何回も何回も読んで過ごしました。

昭和２０年４月に小学校に入学しましたが，７月には国民学校が閉鎖されてほとんど勉強することはできませんでした。日本が敗戦となったことを知ったのは８月１７日のことです。

○　終戦から地獄の生活に

その頃から，何度となく現地の満州人が数人のグループで襲ってくるようになりました。食糧や家畜，金品などを強奪します。あるとき，５．６人の匪賊がやってきて，「滝川を出せ！」と騒ぎました。滝川辰雄さんは開拓団のリーダーでしたので，土地の買収問題などで現地人から恨まれていたのだと思います。その時，大嶋さんが木戸から逃げだそうとしました。正確には馬にエサをやろうとして出たところだったそうです。匪賊の一人が馬から飛び降りて銃を構えました。私は匪賊が立て膝をついて撃つところを目の前で見ていました。銃弾が太ももを貫通し，たくさんの血が流れました。大嶋さんはその日の夕方に亡くなりました。後で知ったことですが，大嶋さんの奥さんと４人の子供は日本へ引き揚げず，中国に残ったそうです。一家の大黒柱を失い，中国人の世話になるしかなかったのだと思います。

夏目幸夫さんは，トウモロコシの太い茎に縛りつけられて滅多突きにされて殺されたと聞きました。みんなで探して見つかったそうですが，本当に気の毒でした。滝川さんの次に土地管理係をやっていたそうです。満州人の土地や家屋を接収したりするので，その係はだれがやっても恨まれる立場だったようです。

私の父は，９月頃に殺された人の仇うちに行き，開拓団の人たちといっしょに匪賊に拉致されたことがあります。父親は馬車に乗せられ，連れていかれました。お母さんが心配して「お父さんは，もう生きて帰れないかもしれない」と言って泣いていたのをよく覚えています。２日後に大八車で戻ってきましたが，ひどい折檻を受けて生きているのかどうか分からないほどでした。匪賊から恨まれている人のいる場所を教えろとか，銃のありかを教えろとか言われたようです。何も教えなかったものだから，逆さづりにされてムチでたたかれ，タバコのやけどの跡

などもあり，体中傷だらけになった父に目を向けられませんでした。でも，絶対白状しなかった父は強かったですね。

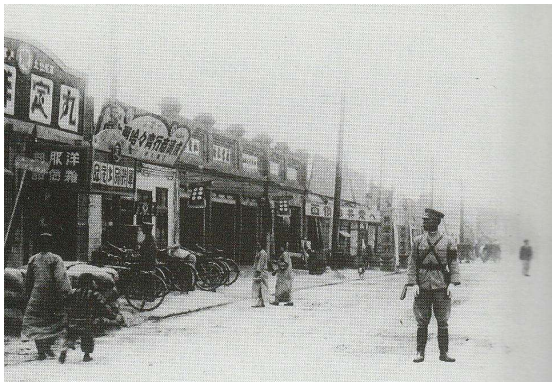
ソ連兵もやってきましたが，ここへ来た兵士たちは匪賊ほどひどくはありませんでした。団長さんたちがうまく対応してくれたおかげかもしれません。

○　逃避行

１０月になって東陽開拓団（熊本県開拓団）の学校宿舎へ入りました。４００人ぐらいの大人数でしたので，２１年の２月ぐらいになると食糧が尽き，集団生活ができなくなって，各地へそれぞれに分かれて行くことになりました。私たちは２０㎞ぐらい離れた新発開拓団（山口県開拓団）へ一時入りましたが，いつ頃からか再びそれぞれに避難することになりました。行くあてのないみじめな逃避行の始まりです。覚えてはいませんが，子供は馬車に乗せ，匪賊に見つからないように夜になってから移動したようです。私たち家族は，蒙古人の家へお世話になることになりました。大勢の小作人がいる大地主でした。裕福な暮らしをしていたようで，私たちに食糧を分けてくれました。私たちは仕事をさせてもらうことで食べさせてもらっていました。一月か二月いたと思います。国民学校の林先生と結婚した従姉妹のせつ子さんの家族もいっしょでした。

その頃，満州で生まれて１歳ぐらいになる弟の剛が病気で亡くなりました。天然痘だったようで，体中にできものができて，乳も飲めなくなって窒息のような症状でした。蒙古人の大家さんに相談すると，親より先に死んだ場合はきちんと埋葬しないで野原に置くのが風習だと言われ，かわいそうでしたが，木の根元に置くことにしました。母が母乳を搾って口元にあげたことを鮮明に覚えています。剛はオオカミに食べられると思いました。

蒙古人の大家さん夫婦には子供がいなくて，妹の素子をとてもかわいがりました。私たちはとても寒い部屋で過ごしましたが，素子だけは大家さんの暖かいベッドに入って，いっしょに寝かせてもらっていました。私たちが大家さんの家を出るとき，大家さんは妹を欲しがって「置いていってくれ，子供にくれ。」と何度も何度も父に要求しました。その蒙古人にはとてもお世話になったのですが，父はそれはできないと頑として断りました。素子はそのことを生涯覚えていて，今でも父に感謝しています。あのとき置いて行かれたら，私はどんなにか悲しい一生になっただろうか，とよく言うのです。


当時のチチハル「満州帝国の興亡」より

○　チチハルへ

５月か６月頃にチチハルへ向かったようです。せつ子さんの話では，その大家さん

が川を船で２日かけてチチハルまで送ってくれたそうです。働いてくれたお礼に何もあげなかったから，という理由だったようです。蒙古人の大家さんは日本の教育を受けている人で，子供を大事にする本当にいい人でした。お世話になれて幸運でした。チチハルまでの逃避行の記憶はほとんどありません。あまり歩かずに済んだからかもしれません。ただ，草原に伏せていた母親が赤ちゃんを絞め殺したという話を聞きました。おそらく匪賊に見つからないようにするためだったのではないでしょうか。いつチチハルに入ったのかは，はっきり分かりません。

チチハルでは吉野屋という収容所にいました。衛生状態がひどくて，亡くなる人が大勢いました。部屋いっぱいの人が雑魚寝でしたが，ノミやシラミに悩まされました。私の叔父家族は，叔父の照男と４歳と２歳の娘が発疹チフスで亡くなり，嫁が一人だけになってしまいました。また，いつも近くに寝ていた人が急に見えなくなり，亡くなったこと知ることもありました。そんなことが何度もあり，何人も死んでいきました。伝染病の発疹チフスがまん延していたのです。私たち家族は運がよかったのか，みんなチフスにかからずに済みました。

姉の美穂は，タバコを売って食べものを買うお金にしてくれました。首にたばこを入れた箱をかけて，「ヤンジョロ，マイマイ（たばこ，買ってください）」と言って売り歩いたそうです。何か大切なものをタバコと交換して，中国人に売っていたのだと思います。チチハルには８月末ぐらいまでいたようです。おばさんたちは洗濯に出かけ，父親たちは中国人に仕事の世話をしてもらって，日雇いで少しばかりのお金を手に入れていました。

あるとき，犯罪者が町中を引きずられて公園の方へ連れて行かれました。私は同級生といっしょに見に行きました。丘の高い所まで登らせると，３人の中国人が一斉に鉄砲で撃ちました。引きずられてきた犯罪者は谷へ落ちていきました。オオカミのエサになるのかと思いました。今思えば，中国の共産党と国民党の争いがあったので，そのためだったのかもしれません。

やっと日本へ帰れるという連絡が来ました。しかし，チチハルからハルピン，新京を通ってコロ島に近い錦州までの列車はひどかったです。屋根のない無蓋列車で，途中で長い時間待たされて，錦州まで１２日か１３日かかりました。まん中に子供を置いて，回りに大人がいたのですが，急カーブは振り落とされるような感じでした。トイレにはみんな困りました。やっと錦州に着きました。そこで１週間ぐらい滞在して船を待っていました。そして，ついにコロ島へ出発する連絡がありました。

無蓋列車 ： 屋根のない貨車が連結された列車

○　母の死

その頃，母の容体が悪化しました。とても体が丈夫な人でしたが，産後の

肥立が悪かったうえに逃避行になり，少しずつ体が弱っていきました。水も食べるものも十分なく，わずかな食べものを子供に譲ってばかりでしたので，やせ細って衰弱していきました。医者もいないのでどんな病気だったのか分かりませんが，お腹が下ってばかりで，せつ子さんが世話をしてくれていました。姉の美穂も洗い物を手伝っていました。何ということでしょうか。コロ島へ出発すると決まった前日に，母が亡くなってしまったのです。遺体はコモにくるみ，父と林先生がかついで行き，野原へ穴を掘って埋けました。母は私たちを必死に守りながら，やっとここまでたどり着いたのに，ただただ悲しくて，くやしくてみんな泣きはらしました。薬か食べものさえあれば，お母さんは‥‥と思うばかりでした。小さな私たちを残して亡くなった母は，どんなにか無念だったでしょう。

「せっちゃん，３人の子を頼むね。」と言い残したそうです。３３歳でした。

帰国後に開かれた三友会の慰霊祭の時，私は宮司をしていた関係で祝詞をあげることになりましてね。当時の母親の姿を思い出して，泣けて泣けて，何も言えなくなってしまいました。「祢宜様が泣いてどうするだ。」と，せつ子さんに叱られましたが，何十年経ってもその時の光景は忘れられないんですよ。

コロ島から貨物船で博多港へ帰りました。兵隊さんも同じ船にいましたが，私たちは一番船底にいました。日本の陸地が見えたときは，叫びたくなるほどうれしかったです。昭和２１年１０月のことでした。

○　貨物船のできごと

コロ島からの帰国する貨物船でのことです。国民学校の校長先生は東栄町出身の永江土岐次先生でしたが，奥さんが船の中で亡くなったのです。博多港へ降りる前の晩のことでした。こんなことって，本当にあっていいのでしょうか。校長先生はどれほど無念だったことでしょう。私も奥さんにかわいがってもらっていたのでとても悲しかったです。

「水葬」　飯山辰雄「小さな引揚者」より

上陸を目前にした船の中で，何人もの人が亡くなりました。亡くなると毛布にくるまれて海に沈められるのです。私は父といっしょに見たことが目に焼き付いています。

「哲人，これが水葬だ。よく見ておくんだ。」と父が言いました。遺体は毛布にくるまれて，船の後部から海へスーッと下ろされます。しばらくすると静かに沈んでいきました。船は遺体の回りを旋回しました。もうすぐ日本に帰れるというのに，本当に気の毒でした。その光景は決して忘れることはできません。

国民学校には校長先生の他に二人の先生がいました。田口町の七原先生と東郷

村の林先生です。私の担任は林先生で，三河東郷駅近くが実家でした。その奥さんは前述のせつ子さんで，私の母親の姪にあたり私と従姉妹同士です。満州で生まれた子が一人いて，いっしょの船で帰りました。せつ子さんが私たちの面倒をずーっとみてくれて，そのおかげで生き延びられたようなものです。チチハルで３歳上の姉の美穂が，タバコを売ってお金を少しでも稼ぐことができたのも，せつ子さんが世話してくれたからだと思います。食べものをいつも私たち子供３人に分けてくれました。配給されるのはわずかな食料でしたので，自分はがまんして私たち子供に分けてくれていたと思います。私の父は中国語が話せたので，開拓団の配給を受け取るためにいろいろ動いていたようですが，くわしいことは分かりません。

○　やっと故郷へ

名古屋駅に着いたとき，北の方に花火が上がっているのが見えました。お祭りだったのかもしれませんが，初めて見たのでよく記憶に残っています。名古屋では，父が県庁に行って知事にあいさつをしたように思います。豊橋からの電車は超満員で押しつぶされそうでした。父は私たち３人の子を守ろうと，大きな声を出していたのをよく覚えています。

そして，懐かしい東栄町のふるさとへ，やっと帰ることができました。母と弟が亡くなったさみしさはありましたが，父と子供３人で家に帰ることができたのはまだ幸せだったのかもしれません。家や田畑を処分した人たちは帰る家もなくて，さらに苦難が続くことになりました。

私は小学校３年生に入りました。それまで勉強をすることはできなかったので，算数の計算などはさっぱり分からず，泣きながら勉強した思い出があります。

明治，大正，昭和の初期にかけて，日本が外国の土地を支配するなど，とんでもない考えで突き進んだことは，反省しなくてはなりません。ひどい国策だったと思います。侵略は戦争への道につながります。決してあってはなりません。

（取材・文責　八名郷土史会　安形　茂樹）